

テサロニケ人への手紙 # 6

「福音を宣べ伝える者の姿勢（１）」 | テサロニケ人への手紙 1章 5～10節

2020.08.30

はじめに

パウロは1章の中で、テサロニケ教会の兄弟姉妹たちが神に選ばれていることについて、感謝を捧げました。その神の選びの根拠として、三つの事柄をあげました

- ①パウロの宣べ伝えた福音が聖霊によるものであること。
- ②その福音を受け入れたテサロニケの人々が聖霊による喜びを持っていること。
- ③福音を受け入れたことによって生活が変わられたこと。(具体的には、偶像礼拝から離れ、生けるまことの神に仕え、再臨のキリストを待ち望むようになった。)

2章では1～12節にパウロの福音宣教がどのようなものであったかについて記し、次いで13～16節ではテサロニケの人々がその福音をどのように受け入れ、迫害の中で御言葉に従って生きたかについて記しています。今日は、前半の2章1～6節の御言葉から「福音を宣べ伝える者の姿勢（１）」というタイトルでお話ししたいと思います。

アウトライン

1. 患難の中での宣教（1～2節）
2. 純粹な動機（3～6節）

1. 患難の中での宣教（1～2節）

兄弟たち。あなたがた自身が知っているとおりに、私たちがあなたがたのところに行ったことは、無駄になりませんでした。

それどころか、ご存じのように、私たちは先にピリピで苦しみにあい、辱めを受けていたのですが、私たちの神によって勇気づけられて、激しい苦闘のうちにも神の福音をあなたがたに語りました。

ここでパウロがなぜこのように詳しく、「あなたがた自身が知っているとおりに」とテサロニケ教会の兄弟姉妹たちがすでに知っている事柄を、あえて記しているのかを理解するには、この手紙の書かれた文脈を考える必要があります。

テサロニケの迫害者から逃れて、アテネ、次いでコリントで宣教していたパウロのもとに、弟子テモテがやってきて報告したところによると、パウロが去った後も、彼に対する非難中傷が激しかったことがわかります。聖書や世界史の背景から推察するとその理由は

- ①紀元前にローマ軍に敗れの属国であったテサロニケは、後に皇帝オクタ비아ヌスを支持

して自由都市として認められた経緯がある。そのためテサロニケは皇帝に背くことは絶対に避けなければならなかった。ところが、パウロは偶像礼拝をやめ、悔い改めて生けるまことの神を礼拝することを勧めた。テサロニケの人たちにとってこれは皇帝に対する反逆ととらえられかねない政治的に危険な教えであるという非難

②ギリシャ世界には、この当時多くの私利私欲のために哲学や宗教を説いて回るいいかげんな偽教師たちがおり、パウロたちも同類であるという非難。

このような非難中傷をテサロニケ教会が受けていることを知ったパウロは、そのことで教会の中が動揺することは避けなければなりません。なぜなら、そうした非難によって神の働きがそしられたり、福音が誤って伝えられてしまう恐れがあったからです。特に誕生して間もないテサロニケの教会にとって、そうした悪いうわさはどんな悪影響を及ぼすか分かりませんでした。そこでパウロは、テサロニケ教会がそのような愚かな非難に動揺してほしくないという思いから、自らの宣教が純粋な神の働きであったことを思い起こさせ、励まそうとしたのです。

パウロはテサロニケへの宣教は「無駄にはなりませんでした」と記しています。この無駄（ケネー）という言葉は「実を結ばない無駄な行為」という意味があります。一見して無駄に見えるようなことも、神の福音を伝える働きに無駄があるはずはありません。私たちも、たとえ今は実を結んでいないように見えるとしても、福音を伝えるという神の働きを止めること、とりなしの祈りを止めることがないようにしましょう。実際、テサロニケへの宣教ではわずか三週間ほどの滞在だったにもかかわらず教会が誕生し、素晴らしい実を結んでいました。

2節には、パウロたちがテサロニケに行ったのは、ピリピでの苦しみと辱めの後であったとあります。一人のマケドニア人が助けを求める幻を見て、マケドニア（ヨーロッパ）に渡り、最初に訪れた宣教地がピリピでした。そこでは古いの霊に取りつかれた若い女奴隷から悪霊を追い出したことから、彼女の占いで利益を得ていた主人に訴えられ、取り調べも受けることもなく、裸にされ何度も鞭を打たれ、犯罪者として投獄されてしまいます。人間はあまりにひどい目に遭いますと、恐怖で怖じ気づき、勇気を失ってしまうものです。パウロも同じであったと思います。彼がこのような度重なる理不尽な迫害にあっても、前進できた秘訣が2節に記されています。それが「私たちの神によって勇気づけられて」という言葉です。

これが彼の勝利の秘訣です。私たちは自分の知恵や能力やコネなどで何かができると思いがちですが、決してそうではありません。パウロとシラスが木の足かせをはめられ、鞭で受けた痛みと苦しみに耐えつつ、真夜中のじめじめした牢獄でしたことは、神様を呪うことでも、文句を言うことではなく「祈りつつ賛美する」ことでした。真夜中の賛美礼拝に囚人た

ちは耳をそばだてていました。その結果はご存知の通り、大きな地震が起こり牢の扉が全部開き、すべての囚人の鎖は外れてしまいました。このような奇跡を目の当たりにして、看守とその家族はイエスキリストを信じバプテスマを受けました。神は牢獄の扉を開かれただけでなく、再び宣教の扉をも開かれました。私は看守だけでなく、囚人たちもこの一連の出来事に遭遇し、主を信じ救われたであろうと想像するのです。囚人たちの鎖が外れたように、彼らも救われ罪の縄目から解放されたのではないのでしょうか。パウロたちはどれほど勇気づけられたでしょう。

〈証し〉

15年以上前の話になりますが、一人の青年が教会の礼拝に集い救われて参りました。その青年は救いの喜びにあふれてすぐに伝道し、さらに二人の知人を教会に連れてきました。2人ともイエス様も信じて、のちに洗礼も受けました。

その二人のうちの一人の青年は大きな問題を抱えていました。生来の気の弱さからくる優柔不断、また誘惑に弱いことから、ある反社会的勢力の人物に騙され、いいように搾取されていたのです。いわれのない一千万以上の借金を負わされ、家族は念書まで書かされました。そのためにその人物が経営する土建現場で住み込み、働かされていました。そのうえ公文書偽造をするように唆され、罪を犯してしまいました。前科一犯、無職で教会にやってきたのです。教会は青年を何とか助けてあげようと、多方面に動きました。まず長老二人と私が、その青年の家に訪問してご家族から事情を聞き、その借金が本当に有効なのかを確認したり、その人物を知っている市議員にも働きかけてもらおうとしたりしました。しかしどれも成果はあがりませんでした。

万事休す。人間的にできることはもう何もなく、神様に働いていただがなければどうしようもありませんでした。それで二人の青年と私と弟の4人が、仕事終わりに毎日教会に集まり、講壇の前に車座になって、聖書を読み、神に助けを求めて祈り始めました。彼は藁にも縋る思いで教会に集っていました。この祈り会が一年以上続いて、神様は次第に私たちを導いて信仰と知恵を与えてくださったのです。まず無職であった二人の青年に職が与えられました。問題の根本は、借金とその人物への恐れでしたが、祈り続けるうちに、気の弱い彼に「自分には生ける神が共にいてくださるのだ」という信仰がおこされ、次第に勇気が与えられたのです。ある日銭湯に誘われた彼は勇気を出して「出るところに出る」とその人物に宣言しました。その日の祈り会に笑顔で報告しに来たのを思い出します。その後、またある方を通して知恵が与えられて、彼が働かされていた労働環境を労働基準監督署に訴えたのです。それで監督署からその人物へ指導が入り、恐れた彼は借金の念書も返してくれて、全ての問題が解決しました。結局、その人物は他の事件で逮捕されて縁が切れたのです。

パウロは祈りによって神からの勇気を与えられていました。祈りは自分の無力さ、だらしなさ、いくじなさをいやと言うほど教え、神の力なしには何もできないものであることを悟らせてくれるものです。そしてそればかりではなく、私たちの願いや思いをはるかに超えた神の力を現実にいただくところなのです。

2. 純粋な動機（3～6節）

3 私たちの勧めは、誤りから出ているものでも、不純な心から出ているものでもなく、だましごとでもありません。

4 むしろ私たちは、神に認められて福音を委ねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただくとして、語っているのです。

5 あなたがたが知っているとおりに、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、貪りの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。

6 また私たちは、あなたがたからも、ほかの人たちからも、人からの栄誉は求めませんでした。

3～6節にはパウロがどのような心で福音を語っていたのか、その動機が語られています。まず3節には3つの否定をもってそれを説明しています。①「誤りから出ているものではない」とあります。これは聖書の真理から外れた偽りという意味です。パウロは聖書から外れて語ることはしませんでした。彼はいつも御言葉から真理を解き明かしたのです。また②「不純な心から出ているものではない」とは性的な不潔を目的として語っているのではないという意味です。そして③「だましごとではない」とあります。「だましごと」とは原語では餌で魚を釣る時に用いられた言葉です。彼は私利私欲を満たすために餌で魚を釣るように、人を食い物にしようとしているのではない。と述べています。逆に言えば、先の偽教師たちはこのような動機で人々に自分勝手な教えを説いて回っていたのでしょうか。考えてみれば、このような事は昔も今も変わらず存在しています。見かけではもっともらしいようでも、その中身はだましごとで満ちています。ですから多くの人たちは宗教には関わりを持ちたくないと思うのではないのでしょうか。宗教は怖い・・・と。しかし、パウロたちの勧めはそういうものではありませんでした。

パウロの宣教の動機は4節に記されています。「人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただくとして、語っているのです。」これがパウロの純粋な動機です。旧約聖書Ⅰサムエル16章7節には、「人はうわべを見るが、主は心を見る」とあります。

偽教師たちの働き

- 特徴 「誤り」 聖書の真理から外れた偽り
- 動機 「不純な心」 性的不潔
- 方法 「だましごと」 餌で魚を釣るような行為

パウロの福音

- 特徴 「真理」御言葉に基づいて語り
- 動機 「純粹」神に喜ばれようとして
- 方法 「公明正大」キリストの愛をもって

5節にあるようにパウロは人に対するとき「へつらいの言葉を用いなかった。」人にこびへつらうようなことはしませんでした。また「貪りの口実を設けたりしたこと。」私利私欲で行動することもなかったと弁明しています。そしてその証人は「あなた方」と「神」であると述べています。もしパウロが、人々にこびへつらうような伝道をしていたら、迫害は起らなかったでしょう。こんなこと言ったらテサロニケ人は不快に思うのではないか、もしかするとローマに敵対してしまうのではないか？そのようなことは承知の上で、神の福音をゆだねられた使徒として、はっきりと語ったのです。「あなたがたには罪があります。罪があれば決して幸せになることはできません。なぜなら神は日を定めて義この世界と罪人を裁かれるからです。すべての問題の原因はこの罪です。あなたは自分の力ではどうすることもできません。この罪から救われることはできないのです。神を信じてください。神はあなたがたのために救い主イエス・キリストを遣わしてくださいました。イエス様があなたの罪のために十字架で死んで、墓に葬られ、復活して下さって、あなたの罪を解決してくださいました。あなたがイエス様を信じるなら、すべての罪が赦されて天国に行くことができます。あなたはこの罪から救われるのです。」そして救われた者には、偶像礼拝から離れ、唯一の神に仕えるよう勧めたのです。

6節にあるように、パウロは人の栄誉を求めませんでした。今風に言えば、彼にとってうつろいやすい人からの評価を得ることに全く興味がなかったのです。彼の心にあったのは神に認めていただくこと。動機は神に喜んでいただくこと、そして彼がいつも宣教の目的としていたのは神の栄光があらさわされることでした。

適応

① 福音宣教（伝道）の働きに無駄はないことを確認しましょう。

伝道もとりなしの祈りも地に落ちることはありません。福音宣教の働きは神の絶対主権の中にあります。私たちのなすべきことは、必ず神の恵みの実が結ぶことを信仰もって祈り続けることです。

② 祈りと礼拝なくして宣教（問題解決）の解決の扉は開かれません。

コロナ渦にあって、さらに生活に祈りと礼拝を取り入れましょう。祈りこそが、正しい自己認識を与えられる場であり、神の驚くべき力を受ける場であることを体験しましょう。

③ 私たちの動機を確認しましょう。

私たちの伝道の動機が純粹であるか、自己吟味をしましょう。自己満足や人の評価ではなく、パウロのように「神に喜んでいただくために」伝道できるように祈りましょう。